

「罪を認める力 赦す力」

マタイ18:21-35

■ 私たちの心に偽物の絵が描かれていませんか？

道路に絵が描かれている動画を観ました。地面がひび割れていたり、道路だったところが川になっていたり、なかったはずの階段があらわれたりする、トリックアートの動画です。通る人は一瞬、驚いて止まったり、なかったはずの階段に動揺して引きかえしてしまったり、まっすぐ進めば正しい道なのに、絵があることで道ではないところにそれで行く動物たちもいました。絵のトリックがわかると、そうだったのか！と笑えます。しかし、私たちの人生にも、まるで本物のような「偽物の絵」が描かれていることはないでしょうか？

■ 記憶と感情 記憶がもたらす感情

人は幼少期に体験したこと、聞いた言葉などの「記憶」に影響を受けています。なので、子どもの時にされて嫌だった記憶があると、大人になって同じことをされた時に感情的になり、相手に腹を立ててしまったり、周りから見ると大したことがないように思えますが、本人にとってはそれが痛みとして残っているのです。私たちの人生を壊そうとするものは、この記憶を制御して偽りの絵を描いてきます。そして、私たちが感情的になり、間違った行動をとるように仕向けるのです。ですから、私たちは心に描かれた絵を見て、「あれ？こうだったかな？」「このままだっていい？」と、自分の心を見張らなければなりません。要人を警護するSPのように、私たちの心をそばで見張り、気づかせてくれるのが聖霊様です。クリスチャンは善良な人ではありません。クリスチャンは、悪い心が出てきたときに聖霊様の声を聴き、神様に拠り頼む人です。

■ マタイ18:11『人の子は、失われている者を救うために来たのです。』

これはマタイの福音書のテーマです。この御言葉を中心に18章が構成されています。

1. 誰がえらいのか(18:1～)弟子たちの興味関心は「誰が一番えらいのか？」でした。イエス様は『子どものように自分を低くする者が、天の御国で一番えらい人です』(18:4)と答えられます。そして、『彼らにつまずきをもたらす者はわざわいであり、もし私たちのからだか私たちがをつまずかせるなら、片手足・片目をゲヘナに投げ込みなさい。身体がそろうてゲヘナに投げ込まれるよりよい。だからあなたがたは、この小さい者たちを見下げないように気をつけなさい』(18:7-10)と言われます。誰かにつまずきを与えるとは、私たちがその人のことを見下げたときに起こります。聖書は見下げる者は罪であり、その私たちが神様の御前に失われていることを伝えています。

2. 1匹と99匹(18:12～)そして、イエス様は『ひとりが滅びることは、父の御心ではない』(18:14)と言われました。

3. 兄弟が罪を犯したなら(18:15～)この後に続くのが、兄弟がもし罪を犯したならどうするかという話です。まずは、友達とよい関係を得るために1対1で話しなさい。それがダメなら二人か三人の証人を立て、それでもダメなら教会に告げなさいと続きます。そして最後は異邦人のように接しなさい、とイエス様は言われました。「異邦人のように接しなさい」とは、こゝまでして聞かないだったらもう関係ない、という意味ではありません。もう一度この書のテーマを振り返るならば、人の子は失われている者を救うために来られ、一人も滅びることを望まれてないのです。そのあとに異邦人のように接しなさいと言われたことは、これは異邦人である私たちが救われた時のように、あなた方もまだ救われていない人のために宣教しなさいという意味です。

私たちの役割は、罪を犯している人たちを裁くのではなく、戻すことです。戻すとは「ずれたものがなおる」という意味です。私たちが兄弟と語り、彼らがズレていた道から悔い改めて戻ってくるなら、私たちは兄弟を得るのです。

4. ふたりが地上で心ひとつに祈るなら(18:19)罪人であった私たちが兄弟を得て、一緒に祈り合うことが教会です。

5. ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです(18:20)

6. 何度赦すか(18:21) このあと、ペテロはイエス様に「何度赦せばよいか」と尋ねます。この時の彼の心はどうだったのでしょうか。さっきまで「誰が一番えらいのか」と議論していた彼らの心には、人を見下す心と傲慢さがありました。これは私たちがもっている罪です。アダムは自分の骨からできたイヴの存在を喜んでいましたが、食べてはいけないと言われた実を食べた時「この女が！」と言いました。40年間荒野でイスラエルの民を率いたモーセは、いつまでも不信仰で、水がないと不平不満を言う民を見て、怒りで杖をふるいました。(民数記20:1-13) あたかも自分が水を出してやっているとかばりに民を裁いたモーセは、約束のカナンの地に入ることができませんでした。イエス様は、『七度を七十倍するまで赦しなさい』と言われました。これは数の話ではなく、赦し続けなさいということです。私たちがしてはならないことは、偶像崇拝と自分が神になることです。私たちは、目の前に起こる出来事を見て「あいつの態度はなんだ！」

と怒り、自分は正しいという傲慢さから相手を裁くこともできます。しかし、自分の罪がわかり、赦されたことを知ると態度が変わります。人生には「絶対に許したくない」と思う酸っぱいこともあります。しかし、私たちが何を選ぶかで、その出来事を甘くすることもできます。私たちの人生は、許し、選り続けることで美味しくすることができるのです。

■ 失われたもの 罪を認める力 赦す力

一万タラントの借りがあるしもべの嘆願を見たとき、王は「かわいそう」に思いました。この「かわいそう」とは、ギリシャ語で splagcni.zomai (スクラグクリゾマイ) という単語で、行動と思いがセットになった神様の深いあわれみの心をあらわしています。王は、このしもべの借りをすべて免除しました。これはイエス様の十字架の贖いと同じで、私たちもすべての罪を赦され、過去の債務証書は破棄されました。しかし、赦されたしもべは、町へ出て行くと直ぐに別のしもべを探しまわり、貸した100デナリを返せないと許さないと行って、牢に投げ入れました。自分の罪が赦されたのに、隣人の罪を責め立てたのです。私たちも同じことをしていませんでしょうか。私たちが自分が罪人であることを知らなければなりません。神様に赦されましたが「私は悪くない」と思っていることがないでしょうか。私たちが「心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです」(18:35) 罪を認められない人は、赦す力も失ってしまいます。

■ 自分の弱さを認めるとき、本当の自分がわかる

タレントの伊集院光さんは、今の芸風でブレイクする前は落語の世界に弟子入りしていました。しかし、彼は落語のあいだに自分のネタを挟んでしまうことがあり、師匠に「今は習ったことをやりなさい」と注意されていました。しかし、彼はお客さんが笑っているならいいじゃないかと思っていました。ある時、師匠が渡してくれた落語家立川談志の落語テープを聞き、「自分がしているのは落語ではない」と思いました。なぜ師匠が「習ったことをやれ」と言われているのかわかりました。そして、自分は混ぜ物をしてでしか笑わせることしかできない、自分の弱さがわかったから落語を辞めさせてほしいと師匠に話します。その後、伊集院光として自分にできることをやり始めた結果、彼は大ブレイクしました。その後、彼が司会を務める番組に談志師匠がゲストで登場したとき、このことを話したそうです。すると談志師匠は「よかったね、光くん。ただね、本当は「僕は落語が苦手だ」って知っていたんじゃないの？それが認められなかっただけじゃないかな。僕のテープを聞いて、それを言う決意ができただけじゃないか。」と言われました。彼はそれを聞いて、「そうかもしれません。師匠の落語を聞いた時、自分に自信がないことを認めることができました。そして、自分にあるものを素直に受け入れたとき、人生が変わったんです」と答えました。

私たちが本当は自分の弱さに気づいています。しかし、それを認めることがなかなかできません。しかし、イエス様の十字架を見ると、神様の愛を受け取り、本当の自分に気づくことができます。心の中に描かれた偽りの絵に気づくなら、私たちは戻ることができます。偽りの絵とは「私は正しい」と思う心です。私たちがどんな人生を願いますか？プライドを持って生きる人生か、自分の弱さを認めるか人生か。私たちが選ぶことができます。

さいごに

イエス様の十字架は私たちに大きな影響を与えました。彼の行動は、嫌われた人々のところに行き、愛のメッセージを伝え、誠実に答える生き方でした。しかし、私たちはクリスチャンであっても許すことができません。教会では愛します、赦します、仕えますと言っていますが、それをしようとするとき、私たちに葛藤があります。でもイエス様が十字架上でされたから、私もやろうと思えます。

今、あなたは本当に許せていますか？もし許せないのなら、神様が自分を赦してくれたことを忘れているのかもしれない。それでも、神様はそれでいいからわたしのところに来なさいと言われます。私たちが神様に拠り頼むとき、本来の姿に戻れます。赦せない人と手を取り、祈れることを願いましょう。ふたり三人が集まって祈るところに、教会ができるからです。

(要約者:岡本 享子)

(2023年10月8日)